

## 審査の結果の要旨

氏名 青木 祐介

本論文は幕末・明治期の横浜における都市と建築に関する諸論文を都市と建築、近代遺跡という2つのテーマに分けてまとめたものである。

第1部（第1章～第4章および付論1）には「都市と建築の諸相」と題して、幕末から明治初期にかけて居留地が形成されていく時期の都市と建築に関する論考を収める。

第1章「伝統都市としての横浜 ―幕末・明治初期の都市形成―」では、伝統都市の観点から横浜の都市形成を捉え直そうとした。居留地の都市改造が実施されるなかで整備された日本大通りが、近代的な都市計画の手法からみて特異な街路であり、その特異性の背景には、伝統的な「火除地」としての機能があったことを示した

第2章「教会建築の近代史 ―洋風建築の移入過程―」では、教会堂に焦点をあて、開港期から震災復興期にいたる建築様式の変遷を概観した。幕末のクライストチャーチ建設資料（イギリス外務省資料）のような建設の具体的状況を知ることのできる資料が発見でき、建設に関わった日本人大工の名前が確認できたことは大きい。

第3章「高島嘉右衛門と大綱山荘 ―高島台に残る和洋折衷住宅―」では、実業家高島嘉右衛門が晩年を過ごした高島台の大綱山荘について、現存する建物の一部を紹介し、関連する銅版画や古写真などの資料をもとにその建設年代や改修時期を検討した。

第4章「明治初期におけるアメリカ公使官邸の建築とその所在地について」では、従来、山手97番地所在とされてきたアメリカ公使の住宅について、ディレクトリーや絵図、古写真を総合的に分析して、その所在地を山手27番地と訂正した。

付論1「史料としての『ファー・イースト』貼付写真」では、『ファー・イースト』紙に貼付された写真を素材に、原本の違いによって貼付写真の細部がどの程度異なるものかを分析した。横浜開港資料館所蔵の2種類の原本を比較検討し、の3つのパターンを抽出した。複数の原本にあたることで、これまで不明だった被写体が明らかになる可能性を指摘した。

第2部（第5章～第7章および付論2）には、「近代遺跡と建築史学」と題して、横浜の近代遺跡に関する論考を収める。

第5章「横浜における近代遺跡調査史」では、これまで横浜市域で確認された近代の地下遺構について、調査史をまとめて、今後の近代遺跡調査に向けての提言をおこなった。建造物でも史跡でもない、近代遺跡という分野の調査研究の蓄積が今後もいっそう望まれることを指摘している。

第6章「御幸煉瓦製造所にみる煉瓦生産 一分銅印の刻印をめぐる」では、近代の出土遺物の調査研究成果として、赤煉瓦の刻印に関する報告をおこなった。これまで分銅印の刻印については小菅集治監製と推測されてきたが、その説に対して疑問を提出した。一方、同じ刻印をもつ煉瓦が、神奈川県川崎市内の御幸煉瓦製造所の元経営者宅から発見され、周辺資料との整合性から、分銅印の刻印が同社のものであることが判明した。

第7章「アルフレッド・ジェラルドと瓦工場」では、横浜でフランス瓦や煉瓦の製造・販売をおこなっていたフランス人実業家ジェラルドと彼の瓦工場について、幾つかの新しい仮説をもとに、現時点での筆者の知見をまとめた。ジェラルド帰国年の解明をきっかけに、その後の工場経営者に関して、ジェラルド周辺のフランス人ネットワークを明らかにするとともに、その人脈形成の原点として1863年の上海が挙げられることを指摘した。ジェラルド本人も上海から横浜へと移ってきた可能性は高いと指摘する。そして、ジェラルド帰国後の工場の経営者に注目することで、ジェラルド工場が繁栄を迎えたのは、むしろジェラルド帰国後のドゥヴェーズによる第二期工場のときだと明らかにした。

最後の付論2では、〈復元〉という整備手法の抱える問題について取り上げている。現在、横浜では2009（平成21）年の開港150周年にむけて、横浜港の原点に位置する象の鼻防波堤の復元がおこなわれている。歴史遺産を継承することと創造することの境界は、歴史学に携わる者にとって考えるべき大きな課題であることを指摘する。

以上の諸論考は、横浜を舞台とした幕末・明治の都市史・建築史研究として多くの成果を上げたものであり、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。